

人と人、そして言葉

— ローゼ・アウスレンダー詩集『雨の言葉』について

加藤 丈雄（京都府立大学文学部准教授）

雨の言葉

雨の言葉が
私に氾濫する

滴しずくによって吸い上げられ
雲の中に押し上げられ
私は雨となって
開いた
真っ赤な
罌粟けしの口もとに降る

(Regenwörter)

ローゼ・アウスレンダーの詩集『雨の言葉』をこのたび翻訳し思潮社より上梓した。上はその詩集全体のタイトルともなっている作品。

ここで詩人は自然のひとこまを描写しながら、言葉に対する根源的な衝動をうたっている。この「雨の言葉」とは、私たちが日々ぞんざいに使い古している日常語の対極にあるもの、詩人の内面にふつふつと沸き上がってくる生まれたての言葉のことをいうのだろう。

地上に降り注ぎ、塵芥ちりあくたにまみれても雨は決して淀み死んだままではない。地中をくぐり、濾過され、陽のぬくもりを受けて気化し、やがては清浄無垢な滴しずくとなって再び雲のなかに戻っていく。

言葉というものもまた姿を変えて還流する。いかに酷使され虐待されようとも、それはいつしか私たちの内面のなかで濾過され、他者との交流に委ねられて気化し、再び濁りのない滴となる。詩人にとって（そして私たちにも）この世界の真実をとらえ、理解するためにはそのような言葉こそが不可欠であるのだろう。

あたえてください

私にあたえて！
まなざしを
私たちの時代の

姿を射抜く

私にあたえて！

言葉を

その姿を写し取る

言葉を

力強い

この大地の

息吹のような

(Gib mir)

「私たちの時代の／姿を射抜く」言葉、「力強い／この大地の／息吹のような」言葉、そんな言葉になろうとして詩人の内面に「雨の言葉」は「氾濫し」、やがては大気中にまで拡がっていく（「雲の中に押し上げられ」）。

しかし、ここで注目すべきは、そのような自己表現の抑えがたい欲求が、拡散するとともに、また何らかの核を得て雨滴となり、再び地上におりてくるという点である。

雨と化した「言葉」＝「私」は「開いた／真っ赤な／^{けし}嚶粟の口もとに降る」という。地上に降るだけではない。ヨーロッパの畑なら、どの畦道にでも見受けられる野草、「真っ赤な／嚶粟」の「口もと」に降るのだという。この何気ない官能性にもぜひ注意を払いたい。なぜならば、官能性こそは人と人をつなぐもっとも原初的な力に他ならないのだから。原語のMohn（^{モーン}嚶粟）といい、Scharlachmund（^{シャルラッハ・ムント}真っ赤な口）といい、いずれも唇をつきだして発音するMOとMUが際立ち、発音のレベルにおいても〈口づけ〉を実際に行う。それは、^{オッフエン}offen（開いた）という形容詞と相まってどんな読者にも感じられるものとなっている（それゆえ、日本語訳においても「赤い口に」ではなく、「真っ赤な口もとに」のようにMAやMOの音を入れなくてはならない。それでもまだ不十分ではあるが）。

言葉を発したい、本当の言葉を見いだしたい——それは、何よりもまず自己表現と呼ぶべきものであろう。しかし、自己を表現することは、他者の存在こそが前提にある。使い古されてはいない、まっさらな独自の言葉を追い求める詩人の到達する先は、どこにでもある隣人の口もとに他ならない。先ほど、官能性こそは人と人をつなぐもっとも原初的な力であると言った。フロイトの言を待つまでもなく、幼い子供のなかにも性的な感受性は備わっている。分化した性を持ち、母の胎から生まれ落ちる人間という種にとって、乳首をまさぐる口こそは（そして〈口をつける〉という行為こそは）、自己と他者をつなぐ第一の結節点である。その同じ口がまた言葉という自他をつなぐ高度な（そして危うい）結節点を生み出す器官でもあるということ、このことにはとても深い意味がひそんでいるように思われてならない。

そのような思いはともかくとして、私たちは、この詩を読んで、内側から沸き上がる自己表現の衝動とともに、他者と交わりたいという止みがたい詩人の欲求を感じ取る。そして、それは取りも直さず、私たち読者のなかにも「氾濫し」て止まないものであることを知る。こうした、他者との交流願望を何より感じるからこそ、私はローゼ・アウスレンダーという詩人の作品を日本語に翻訳してみたいと思い立ったのである（それまで彼女はまったく未知の詩人であった。今でも日本では残念なことに、ほとんど知られてはいない）。

1901年、当時オーストリア領であったブコヴィナ地方（現在のルーマニアからウクライナにまたがる地域）の中心都市チェルノヴィツに生を受けたロザリー・ベアトリーチェ・シェルツァー。彼女が、はたしてどのような人生を経て詩人ローゼ・アウスレンダーとなり、どのような評価を戦後ドイツで与えられることになったのか、ここでは立ち入らないが（詳しくは拙訳詩集の解説を御覧いただきたい）、その代わりに次の詩「セルフ・ポートレート (Selbstporträt)」の一部をお読みいただきたい。

ユダヤのジプシー女

ドイツ語を話す

黒と黄色の旗*のもとで

教育された

国境が私を追いやった

ラテンそしてスラブ

アメリカそしてゲルマンへと

(……)

*オーストリア・ハンガリー帝国の国旗。

あるいは、次の作品を。

孤独 II

本当になった

あのジプシー女の予言が

おまえの国は

おまえを見捨てるだろう

おまえは失うだろう

人々を　そして　眠りを

語るだろう

閉ざした唇で

見知らぬ者の唇に向けて

愛することはおまえを

孤独は

おまえを　抱擁するだろう

(Einsamkeit II)

ここでもまた「雨の言葉」同様に「唇(Lippen)」が大きな意味を担っている。上述した〈交流願望〉は、「孤独」というタイトルの作品の中にもまた「唇」や「抱擁する(umarmen)」といった言葉の官能性・肉感性のなかに託されているようである。

開明的な両親のもとに育ったアウスレンダーは決してユダヤ的な詩人ではない。しかし、彼女もまたあのユダヤ人を襲った過酷な運命を免れたわけではなかった。上の二作品にもまして、次の詩を読めば

そのことがよく感得できるだろう。努めて簡潔になされた表現のなかにどれほどの思いが込められていることか。

戦争が終わったら

残っていたもの一切を
 私たちは投げ出し
 餓えをしのごうとした
 私たちは悲しかった
 でも希望を失っていたわけではない

身内の人たちが訪れてきては
 勇気づけ
 励ましの言葉をかけてくれた

戦争が終わったら
 また会おう
 いっしょに喜びをかみしめながら

そう別れのあいさつを交わし
 あの人たちは去っていった　そして
 いのちを奪われた

(Nach dem Krieg)

ゲッターに囲い込まれたアウスレンダーは、収容所への送還を逃れるため、病弱の母をともない地下室を転々とした。そのような生活のなかでも彼女は詩を書き続けたという。悲惨きわまる現実に対して、詩という〈対世界〉を創出することで彼女は、絶望にも、そして死の誘惑にも耐えることができたのだろう。その〈対世界〉を彼女は「絶望的な希望から生まれた」と語っている。

希望　IV

私の
 絶望から
 生まれた言葉

 〈詩を作ることは
 まだ可能だ〉
 絶望的な希望から生まれた言葉

(Hoffnung IV)

あるいは、その〈対世界〉はアウスレンダーによって「母なる国」とも呼ばれている。

母なる国

私の父なる国は死んでしまった

あのものたちがそれを葬ったのだ

劫火の中

私は生きる

私の母国

言葉の中で

(Mutterland)

こうした〈対世界〉への信頼、つまり言葉に対する信頼は、すなわち人間そのものに対する信頼に他ならないだろう。人を信じずして言葉を信ずることはありえないのだから。もちろん今さら言うまでもなく、ユダヤ人の受けた仕打ちは「条理を超えたもの」であり、「悪夢のようにのしかかり人の心を押つぶす」ものであった。また、彼女は次のようにも語っている。「後になって初めて感じる衝撃の強さと癒されぬ痛みのなかで、私の詩の形式も辻褄^{つじつま}を碎かれ、脚韻を失いました。花を語る言葉は枯れ死んだのです。たくさんの形容詞もまた疑わしいものになってしまいました」。幸運にも生き延びたとはいえ、彼女が受けた心の傷の深さは計り知れない。しかしながら、それでも彼女は詩を書くことを放棄することはなかった。戦後「母なる言葉であり、殺人者の言葉」でもある「ドイツ語」で詩作をしなかった一時期にあっても彼女は英語で詩を作り続けていた。詩を作り続けることで、彼女は言葉を、そして人を信じ続けようとしたのである。

「雨の言葉」で見た、他者の「口もと」に触れたいという願い、それは人と人をつなぐ言葉への、つまりは、人間への信頼の表われとも言えるものであるが、それこそがローゼ・アウスレンダーの詩の本質をなしている。そして、それこそがまた、同郷の詩人であるあのパウル・ツェランと彼女とを隔てる本質的な違いであるとも言える。

二十歳ちかくも年少のツェランであるが、彼とアウスレンダーはチェルノヴィッツ時代にすでに面識があった。ふたりのユダヤ系ドイツ詩人の味わった体験のうち、どちらが悲惨であったのか、私には判断することはできない（そのようなことに意味があったとして）。ともかく、ふたりは生き延びた。六万人いたチェルノヴィッツのユダヤ人のうち戦後に生き残ったわずか五千人のなかに、このふたりの詩人もふくまれていた。それから十二年、それぞれの道を歩んだふたりは再会する。パリに暮らすツェランをアウスレンダーは訪問するのである（1957年5月と11月）。ニューヨークに暮らし、英語で詩作していた彼女にツェランは新しいドイツ語詩の可能性を示してくれた。このヨーロッパ旅行以降、アウスレンダーは、再び意欲的にドイツ語で詩作を行ない、伝統的な形式とは無縁の、いわば彼女独特のドイツ抒情詩を生み出し始める。枯れ死んだ「花を語る言葉」にかわり、研磨を重ねられた「^{ウァ・ヴォルト}根源語」が用いられ、「碎かれ」「失われ」た脚韻にかわり、独特の内的リズムが詩を満たすこととなるのである。ニューヨークを離れ、ウィーンそしてデュッセルドルフと、様々な土地を転々としながらも彼女はそうした独自の詩を書き続けた。

70年、セーヌ川に身を投げたツェランとは異なり、アウスレンダーは寝たきりとなってからもなお、面会謝絶のホームの一室で書き続けた。詩作は彼女にとって「呼吸すること」と同じであった。つまり詩を書くということは「生きること、生き延びること」そのものなのであった。最後までそのように彼女を駆り立てたもの、それはもちろん言葉を媒介にして他者と結びつきたいというあの根源的欲求であった。そのとき、彼女の意識にあったのは、もはや個々の人物などではなく、個別の相を離れた理念と

しての〈人間〉であり、その普遍的総体と一体化したいという衝動であっただろう。

どうやら私は当初の計画を踏み外してアウスレンダーの詩そのものに深入りしすぎたようだ。

〈翻訳〉というテーマに関する原稿を依頼されたとき、ちょうど拙訳詩集のゲラに目をとおしていた私は、ドイツ語詩を日本語に訳す上での苦労や工夫を披露すればいいのだらうと簡単に考えた（たとえば、先ほど少し触れたMOやMUの音の問題などに類したこと、あるいはドイツ語にあって日本語にはない文法的・語彙的な特徴、そして文化的な相違点などを）。しかし、いざいろいろ細かなメモを前にしてみると、そのような苦労話や、ある種の自慢話を面白くお伝えできるほど私は訳者として十分な経験を積んではいないことに思い到った。よしんば、うまく話を展開できたとしても、やはりドイツ語・ドイツ文学にまったく関係を持たない読者の方には退屈の極みではないか。そこで、アウスレンダーの詩（訳）そのものに触れてもらいながら、そもそも翻訳という行為を行わせるもの、その源に思いを馳せていただこうと考えたのである。

できれば、その際にはこれまでの著名な翻訳家の方々の翻訳論も検証したいとも思っていた。たとえば、翻訳もまたその国の文学たらねばならないのだから大胆な意識をすべし、という立場と、異国の文化の産物たる外国文学であるからこそ、その翻訳はできるかぎり直訳されるべきであって、そこから来る難解さも含めてそれこそが翻訳の使命であるという立場、それぞれの言い分を私なりに考えてみようとも思っていた。

だが、アウスレンダーの詩を引用していくうちに、そのような目論見を忘れ、つい自分の解釈を披露しすぎてしまったようだ。

しかしながら、訳者としては、当初考えていたような生半可な翻訳論でお茶を濁すよりは、自らの訳業そのものをできるだけ多く示し、読者の判断をあおぐ方がむしろまっとうなやり方なのかもしれない。そう考え、今回は翻訳論・翻訳技術論などに立ち入らずに、このまま本稿を閉じてしまうほうが好ましいと思うようになった。

とはいえ、最後にひとつだけ翻訳について（それも詩の翻訳について）贅言を費やしておきたいことがある。

それは、詩を翻訳するという行為と詩を創作するという行為との極めて近い関係についてである。もちろん程度の違いではあろうが、小説や評論あるいはその他の散文を訳すのとは異なり、詩の翻訳は一語一語のレベルで最もふさわしい単語を探る行ないである。それは、母語で詩人が行っている行為と基本的にはかわらないのではあるまいか。少なくとも私の実感からはそう思えてならない。

たとえば「寂しい」とか「悲しい」といった既成の言葉ではとらえきれない〈何か〉を感じた詩人は様々な言葉を動員し、その〈何か〉にふさわしい形を与えようとする。彼の頭のなかにあるそれは新しい言葉の組み合わせによって形を与えられるのを待望している（再び、アウスレンダーの言葉を借りれば「氾濫して」いる）。ドイツの詩人であれば、einsam（寂しい）という言葉では捉えきれない、ある感情に襲われたとき、彼らはeinsamを離れ、よりeinsamの本質に近づく言葉たちを、そしてイメージたちを求めることになるだろう。

そうして生まれたオリジナルの詩を前にして、訳者もまた言葉を一語一語探る。詩人がeinsamという言葉では捉えきれなかった〈何か〉を言い当てたとき、それは詩人にとって至福の瞬間であろう。同様に、別の言語体系において訳者も詩人が行なった試みを繰り返す。ドイツ語で詩人が言い当てた〈何か〉を、日本語を用いて言い当てようとする。「寂しい」という言葉を離れ、「寂しい」の本質により近づく

言葉たち、そしてイメージたちを追い求めるのである。残念ながら、多くの場合には、過不足があり、ずれがある。とはいえ、詩人が感じたであろう至福をつかのま味わえる瞬間もまた、ないわけではない。

少しおこがましいが、そんなとき訳者である私は、はるかドイツの、しかももう二十年ほど前にこの世を去ったアウスレンダーという詩人と確かな紐帯によってつながっているのを感じる。少なくとも、そんな幻想に捉られる。時空を超えた紐帯は、さらにその原詩^{オリジナル}を読む読者たちとも、そして拙訳を読んでくださる日本の読者たちともつながっていく。

言葉と言葉

私たちは隣同士

言葉と言葉の

ねえ

おしえてください

あなたのいちばん好きな言葉を

私のは

あなた

(Wort an Wort)

願わくは、アウスレンダーの言葉が、日本においてひとりでも多くの「あなた」と出会い、ひとつでも多くの「開いた／真っ赤な／罌粟の口もとに降る」ように。